自作の風景68

稲滓火や魚沼産の煙立ち

光雄

稲滓火（いなしび）を載せている歳時記は少ないが、稲刈の後に出る藁屑や籾殻を刈田の隅に集めて燃やすと、燻りながら煙が立つ。それを農家では稲滓火や稲屑火と言っていた。燃やした後は翌年の堆肥として田へ鋤き込む。新潟へは何度も吟行したが、晩秋の米どころを通ると、あちこちに稲滓火の煙がたなびいていた。魚沼産コシヒカリの稲滓火であれば、煙も魚沼産だと思った。

句集『田の神』所収　二〇〇四年刊